

提出日 平成24年3月28日

平成23年度 総合文化研究所 研究助成報告書

研究の種類 (該当に○)

○海外共同・共同研究・個人研究・出版助成

研究代表者 (所属・職名・氏名)

生活科学科・教授・植木 武

研究課題名

日米中のいじめ問題にみる文化比較 ―いじめ問題にみる3カ国の文化相違―

研究分担者 (共同研究者)

生活科学科・非常勤講師・石橋 義永

統計数理研究所・教授・吉野 諒三

コーネル大学・ヒューマン エコロジー学部・教授・イレイン・ウェズィングトン

コーネル大学・教育学部・教授・ドーン E. シュレイダー

ネブラスカ大学・准教授・ジュリア・トークオティ

ネブラスカ大学・教授・スーザン M. スウェアラー

ウェブスター大学・教授・ロイ・タマシロ

ハワイ大学ホノルル コミュニティー カレッジ・准教授・ロバート・エドモンドソン

ハワイ大学ホノルル コミュニティー カレッジ・准教授・フミコ・タカスギ

寧波大学・教授・張正軍

研究期間

平成23年 6月 アンケート作成のため相談開始。

10月 アンケート内容のだいたいの一致を見た。

平成24年 2月 日文・英文・中文アンケート作成完了。

3月 英文アンケートをアメリカの4大学へ郵送完了。

日文・中文アンケート郵送を保留中（日文は、4月の新学年が始まってから郵送予定。
中文は、税関の問題があり、現在、中国の共同研究者と検討中。

研究を実施することになった経緯 (海外共同の場合のみ記入)

協定校であるコーネル大学と共同研究を行う目的で、「家族の絆」をテーマにこちら側から呼びかけた。家族のアンケート調査なら、ついでに「いじめ」問題もと思い、ふたつテーマで調査を開始したのが第1次調査であった。第2次調査の今回は、「いじめ」を主に「家族の絆」は従として、今年度(H23年度)は2年目である。

アメリカの大学でアンケート調査を行う場合、人権委員会(IRB)の問題があり、大変に面倒な手続きがあり、そのアメリカの大学に熱心な共同研究者がいなければ実行は不可能であるということに気づいた。

研究組織 [氏名, 所属, 役割分担]					
植木 武, 生活科学科・教授, 統括・アンケート作成・配布・回収・分析 石橋 義永, 生活科学科・非常勤講師, アンケート作成・配布・回収・分析 吉野 諒三, 統計数理研究所・教授, アンケート作成・配布・回収・分析 イレイン・ウェズィングトン, コーネル大学・ヒューマン エコロジー学部・教授, アンケート作成・配布・回収・分析 ドーン E. シュレイダー, コーネル大学・教育学部・教授, アンケート作成・配布・回収・分析 ジュリア・トークオティ, ネブラスカ大学・准教授, アンケート作成・配布・回収・分析 スーザン M. スウェアラー, ネブラスカ大学・教授, アンケート作成・配布・回収・分析 ロイ・タマシロ, ウェブスター大学・教授, アンケート作成・配布・回収・分析 ロバート・エドモンドソン, ハワイ大学ホノルル コミュニティー カレッジ・准教授, アンケート作成・配布・回収・分析 フミコ・タカスギ, ハワイ大学ホノルル コミュニティー カレッジ・准教授, アンケート作成・配布・回収・分析 張正軍, 寧波大学・教授, アンケート作成・配布・回収・分析					
研究発表 (印刷中も含む) 雑誌及び図書					
著者名	論文名	学会誌名	巻 (号)	発表年	最初と最後のページ
植木・山森・石橋・ウェズィングトン・ウォン・エドモンドソン	「共立女子大学・コーネル大学共同研究プロジェクト」共立女子大学総合文化研究所報告第14号			2008.3	12 頁
植木・山森・石橋・ウェズィングトン・ウォン・エドモンドソン	「共立女子大学・コーネル大学共同研究プロジェクト 日米国際比較にみる家族の絆」共立女子大学総合文化研究所報告第15号			2009.2	29～30 頁
植木	「日米学生比較」共同利用実施報告書 平成20年度. 統計数理研究所			2009.7	107～109 頁
植木・山森・石橋・Wethington・Wang・Edmondson	「家族の絆といじめ問題」第82回日本社会学会報告要旨集			2009.10	122 頁
植木・山森・石橋・Wethington・Wang・Edmondson	「日米国際比較にみる家族の絆—大学生から見た家族への思い—」共立女子大学総合文化研究所報告第16号			2010.2	33～34 頁
植木・山森・石橋・吉野・Wethington・Wang・Edmondson	『シンポジウム 日米国際比較による家族の絆といじめ問題』共立女子大学総合文化研究所			2010.2	1～68 頁
植木	「日米学生比較：家族の絆」共同利用実施報告書 平成21年度. 統計数理研究所			2010.9	129～131 頁
植木・山森・石橋・吉野・Wethington・Wang・Edmondson	「日米国際比較にみる家族の絆—大学生から見た家族への思い—」共立女子大学総合文化研究所報告第17号			2011.2	27～29 頁
植木・山森・石橋・吉野・Wethington・Wang・Edmondson	「日米国際比較にみる家族の絆—大学生から見た家族の思い—」共立女子大学総合文化研究所紀要第17号			2011.2	101～140 頁

植木	「日米国際比較にみるいじめの問題」 共同利用実施報告書 平成22年度. 統計数理研究所	2011.9	133~134 頁

研究実績の概要

アンケート作成が数ヵ月遅れたこともあり、今年度一杯で配布・回収は行えなかった。そこで、現在のところ、5月中旬をもって配布・回収を完了する予定である。5月中旬に回収が終われば、データベース作成や統計解析を9月までに終え、10月の日本社会学会で発表する予定である。

今回の3ヵ国にわたる「いじめ」と「家族の絆」調査で、ひとつ新しい理論を構築しようと考えている。つまり、アンケート用紙で質問すると、その文化がもつ基準 (norm) とか常識とかいうものに強く影響される回答があり、ひらたく言えば「たてまえ」回答になる場合がある。そこで、真にそうであるかどうかを検証するためには、「ほんね」を引き出さねばならないと考えた。そして、「ほんね」は「行動」に表れるという前提のもと、今回は「行動」も調べ、「たてまえ」回答を「ほんね」回答で検証してみようという試みである。「たてまえ」と「ほんね」が、実際のデータで合致すればよし、もし、合致しなければ、それは何故かと議論を展開できると考えた。このわれわれの分析法が、異文化間比較調査分野においてブレイク・スルーになることを祈る。